教養の使い方

遠藤　　史

「教養の・ある人・ない人」について書くことを求められたので、この両者を決定的に分かつような要素を探してみようと考えてみたのだが、どうも上手く見つからない。だが、よく考えてみると、そんなものを見つけられると思った自分が間違っていたのかもしれない。たしかに、「これさえあれば教養のある人になれる!」というような要素やアイテムがもしあったとしたら、とうの昔に誰かが指摘しているはずだ。心ある人は皆それを身につけようと努力していたことだろう。逆に、「これがあったら教養のない人になってしまう!」というような要素やアイテムが仮にあったとすれば、これもとうの昔に誰かが指摘しているだろう。そして皆がそれを捨てようとして必死になってきたに違いないのだ。

そこで少し方向を変えて、教養の「良い使い方」について考えてみようと思う。ある人が教養の「良い使い方」をしているなら、その人は「教養のある人」になる（あるいは少なくとも周囲からそう見なされる)。逆に、ある人が教養の「悪い（←良くない）使い方」をしているとしたら、その人は「教養のない人」になる（あるいはそう見なされる）と考えてみる。このように考えれば、少しは柔軟に考えを進めることができるかもしれない。ただし、こういう文脈で「良い」とか「悪い」とか言うことは、煎じ詰めれば趣味やスタイルの問題になることだろう。だから精々僕の好みや偏見を伴った議論にしかならない可能性は捨てきれない。それでもこの議論を提起してみる意味はあるのではなかろうか。

というのは昨今、「教養」という言葉が世に溢れているからだ。試みにアマゾンのウェブサイトで教養を題名に持つ本を検索すると、夥しい数が見つかる。書店の本棚を覗いてみても同じような状況だ。公務員試験関係の本を別にしてもかなり残り、しかもその多くはごく最近出版されたものなのだ。和歌山大学に「教養の森」ができた頃はまだこのような状態ではなかった。その後明らかに「教養」はブームとなり、大学名・学部名の中に組み込まれることも多くなり、ビジネス雑誌の特集に登場するようになった。そして現在は飽和して、インフレーション気味だ。もともと「教養」という言葉には多義的なところがあり、そこに広がりがあって好ましかったのだが、現在のような、何でもかんでも教養と呼んでいるような状態は、少し行き過ぎではないかと思う。ここで改めて「教養とは何か」と問うこともできるかもしれないが、堅苦しい議論として嫌われてしまうかもし

れない。だからいったんその議論は脇に置き、教養の使い方から考えてみよう。こんなふうに奇妙に膨れ上がってしまった「教養」なるものの雑多な堆積を回避して考えることができるから。

本論に戻ろう。教養が良くない使われ方をしているとすれば、やはり教養が本来の目的のために使われてないケースが妥当するのではないだろうか。当然ここではその「本来の目的」とは何かということが問題になるだろうが、ここは本学の教養教育の趣旨である「人間になるための教育」(the art of being a human)をあげておく。ここでart（ラテン語ars）というのは、技術・学芸・芸術などを包摂する幅広い概念だから、もう少し格好良く「人間になるためのアート」と言ってしまっても構わない。このように考えを進めてくれば当然、「人間になること」を射程内に置いてないような使われ方が候補となる。

あえて一例をあげるなら、ビジネスを成功させるために教養を身につけろと言うようなスローガンが具体例ではないだろうか。最近増殖している「教養本」の中にもこのようなものは多いし、ビジネス雑誌の特集にも登場してくる（「今、ビジネスパースンが知るべき教養ベスト10」とか「ビジネスパースンの必須教養はこれだ！」のような見出しになるだろう）。最近では「ビジネス教養」という摩訶不思議な用語さえ登場する有様だ。

以前ならば、本業の他に求められるスキルといえば、会計・法律・外国語（特に英会話）あたりが定番だったと思う。こういうスキルなら理解できるのだが、なぜ最近のビジネスパースンはかくも熱心に教養なるものを求めるようになったのだろうか。この違和感の中心にあるのはやはり、こうした「教養本」の類いの中で、教養がビジネスの成功に奉仕するための一つのアイテムとして位置づけられてしまっていることだと思う。このような位置づけでは、たとえその教養なるものを身につけたとしても、ゴールは「人間になること」ではありえない。あくまでビジネスの成功がゴールだ。それは、教養の本来の目的からは離れているのではないかと思える。

この意味では、最近出版された山口周氏の『ビジネスの未来』（プレジデント社、2020年）は刺激的な論考だ。氏はすでに多くの著作を発表しておられるが、僕は長いことその方向性を、ビジネスの成功のためのアートの必要性を訴えるものだと誤解していた。ところが、この本の冒頭で山口周氏は「ビジネスはその歴史的使命を終えつつある」と喝破し、現代社会の全体像を視野に入れつつ、人間

性の側からビジネスの存在意義を果敢に問い直しにかかる。その向かうところは、この本の副題「エコノミーにヒューマニティを取り戻す」が示すとおりである。この本が日本のビジネス界の人々にどのように評価されるのかに僕は注目している。それによって、ビジネス界が教養をどれほど真剣に扱おうとしているのか判別できると思うからだ。

ここまで僕は「良くない使い方」というマイルドな表現を使ってきた。ここからは敢えて「悪い使い方」に駒を進めよう。もちろん、いわゆるスノビズムは教養の悪い使い方の一例ではあろうが、これはもう言い古されたことだ。それにスノビズムは精々嫌味な態度に留まり、他人に悪印象を与える程度の効果しかない。そんなものではなく、他人に直接的に害を与えるような、教養の悪い使い方があるように感じるのだ。

その最たるものは、教養のない（あるいは教養がないと判断される）相手に侮蔑の感情を抱くことだと思う。この考えが発展すると、そういう相手の存在を否定するという極端なレベルまで進む。小説を例にとりあげよう。このような図式に沿って展開される小説のベストは何といってもドストエフスキーの『悪霊』であろうが、これは革命思想も関係しているので、もう少し分かりやすいものをあげる。日本ではあまり話題になった記憶がないが、アメリカの作家ドナ・タート（吉浦澄子訳）の『シークレット・ヒストリー』（上下二冊、扶桑社ミステリー、1994年）という小説がある。原書Donna Tartt, *The Secret History*, Penguin, 1993はアマゾンのサイトでは現在も熱心なレビューが続いている国際的なベストセラーだ。

舞台はアメリカ東部のヴァーモント州のリベラル・アーツ・カレッジ。故郷で挫折を味わった主人公はこの大学で、古代ギリシア語・文化を学ぶエリート的なゼミナールに参加を許されるが、ある夜、秘儀的な雰囲気の祝祭の中で、ゼミ生の一部がバッコス祭の再現に見立てて、面白半分に地元の農夫を殺す。その事件の真相に遅まきながら気づいた別のゼミ生を、主人公たちは口封じのために殺す。やがて警察の捜査の手が及ぶにつれ、彼らは徐々に精神の均衡を失い、最終的には殺し合い＝破滅に至るという物語である。小説の冒頭に近いところで主人公はこう言っている。「私の致命的欠陥とは美しいものに対する病的なまでの憧れ、これである」と。つまりこの小説の構図は、美しいものが分かる人間たち（主人公たちの一群）に対する、それ以外（一般大衆）という基本的図式のもとで、前者が後者を侮蔑し、抹殺しようとする動機に支配されている。

もちろんこの小説全体は寓話であり、最終的には主人公たちが破滅することにより、貴重な教訓が与えられるという仕掛けだ。その教訓とはおそらく、優れた人間（あるいは優れていると自分が思っている人間）がそれ以外の人間を侮蔑してもよいという考えは、間違っているということである。これに教養という要素を外挿した場合、教養がある（あるいは教養があると自分が思っている人間）がそれ以外の人間を侮蔑するようなことは間違っている、ということになる。僕が論じてきた趣旨から述べ直せば、これは教養の「悪い使い方」だということになるだろう。

以上は小説の話にすぎないが、最近僕が危惧しているのは、教養という用語が政治的な目的をもって使われることが増えてきているのではないかということだ。過去においては、教養をもって日本社会に苦言を呈すというのは、保守的な知識人の専売特許だった。これは分かりやすい図式だ。若い世代はこれに反発し、革新的な知識人の応援で奮起し、かくして世の中は回る。ところが最近では、相手の教養の程度を乱暴な言葉で貶めるような声が大学人の中からも聞かれる。相手を「反知性主義」だと罵る声さえある（もっともこのような「反知性主義」という用語の使い方は本来のものではない。森本あんり『反知性主義』（新潮選書、2015年）を参照）。その批判の相手はたいてい政治上の対抗勢力である。明らかにここで、「教養」や「知性」のような用語は、敵と味方を峻別する要素として政治的に使われている。これは危険な兆候で、もう一歩進めば相手を侮蔑する感情を引き起こしかねない。こういう状況は教養の悪い使い方のように思えてならない。政治に敵と味方は付き物かもしれないが、そこに教養が関与させられる理由はない。

以上に教養の「良くない・悪い使い方」の事例を検討してきた。ではどうすればよいのかと問われても、僕に素晴らしい提案の用意があるわけではないが、最低言えることは、教養は何かに奉仕するためのアイテムでないことは確認しておく必要があるだろうということである。以上で検討してきたように、教養はビジネスの成功に奉仕するものでもないし、ましてや政治における敵と味方との峻別に奉仕するものでもない。人間らしさに奉仕するということだけは言えるかもしれないが、これは当然「人間らしさとは何か」という次の問いを生む。その「人間らしさ」を考えることもまた教養なのである。

もう一つ確認しておくとすれば、教養が短期的なスパンで何かを生み出したり、あるいは何かを即座に刷新したりするようなものだと考えない方が良いというこ

とだ。スピノザの『エチカ』は約350年前に書かれたが、現在でも多方面に影響を与え続けている。これほど巨大な存在でなくとも、ある小さなものに誰かが次のものを一つずつ付け加え、長期間にわたって様々な営みが引き継がれていくというケースは多数ある（クラシック音楽における和声や対位法などはその好例である）。悪い使い方に足を掬われないように気を付けて、小さくとも確実に教養を継いでいくことができれば、それが一番良いのではないだろうか。